

論壇

ウイルスと共存の生活

「不都合な真実」(inconvenient truth)と

は、米国の元副大統領であったアル・ゴア氏が関わった気候変動(地球温暖化)に関するドキュメント映画や書籍のタイトルである。気候変動によって私たちが受ける影響は深刻なものであり、とても受け入れたくないものであるが、それが真実であるというメッセージである。

新型コロナウイルスの感染にも似たような面がある。少しの期間だけ我慢すれば生活が元に戻るだろうという、漠然とした期待感が

元重 伊藤 (国際経済学) 学習院大教授

あった。感染者数が減少する傾向を示した時期もあった。しかし、人々がもつと外に出るようになる

と、再び感染が増える傾向が始まった。世の中では感染の第2波と

いうことが語られるようになってきた。短期間で見違えるようにウイルス問題が消滅することはなさそう

だった。人々の接触機会が増えれば感染が拡大するのは当然だし、ワクチンが年内に多くの人に引き渡る

不都合な真実

ということもなさそう。仮にワクチンが行き渡ったとしても、ウイルスは少しずつ姿を変えていく

こともあるようだ。新型コロナウイルスとは異なったもつと厄介な

医療崩壊につながりかねないような、医療システムの脆弱性が見られる。医療保険体制の本格的な見直しが必要だ。

ウイルスの感染を抑えるには、社会的な距離を維持することが必要となる。在宅勤務・eラーニング・オンライン診療などを、もつと本格的に活用する社会に変えて

いかななくてはいけない。教育分野などでは対応が1年遅れただけで、その時代の子供たちに甚大な影響が及ぶ。eラーニングだけで

それに対応できるわけではないが、もつと有効に活用できるように環境が必要だ。

より抜本的対応 早急に

政府のデジタル化対応の遅れも深刻だ。今回のコロナの経験で、日本のデジタル化が非常に遅れて

いることが明白になった。国民に10万円ずつ配るのにこれだけの時間がかかったことがその典型だ。マイナンバー制度の活用をはじめとした公共サービスのデジタル化を進めなくてはならない。デジタル化の推進は、私たちの働き方も変えていくはずだ。

突然のコロナウイルス騒動で、とりあえず緊急対応で精いっぱいだった。しかしウイルス問題が長期化するとしたら、緊急対応ではなく、より抜本的な対応が必要となるはずだ。今回取り上げた対応はその代表的なものだが、他にも必要な対応はいろいろあるはずだ。コロナと共存するというニューノーマル(新常态)に対応できる社会を早急に作っていく必要がある。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。